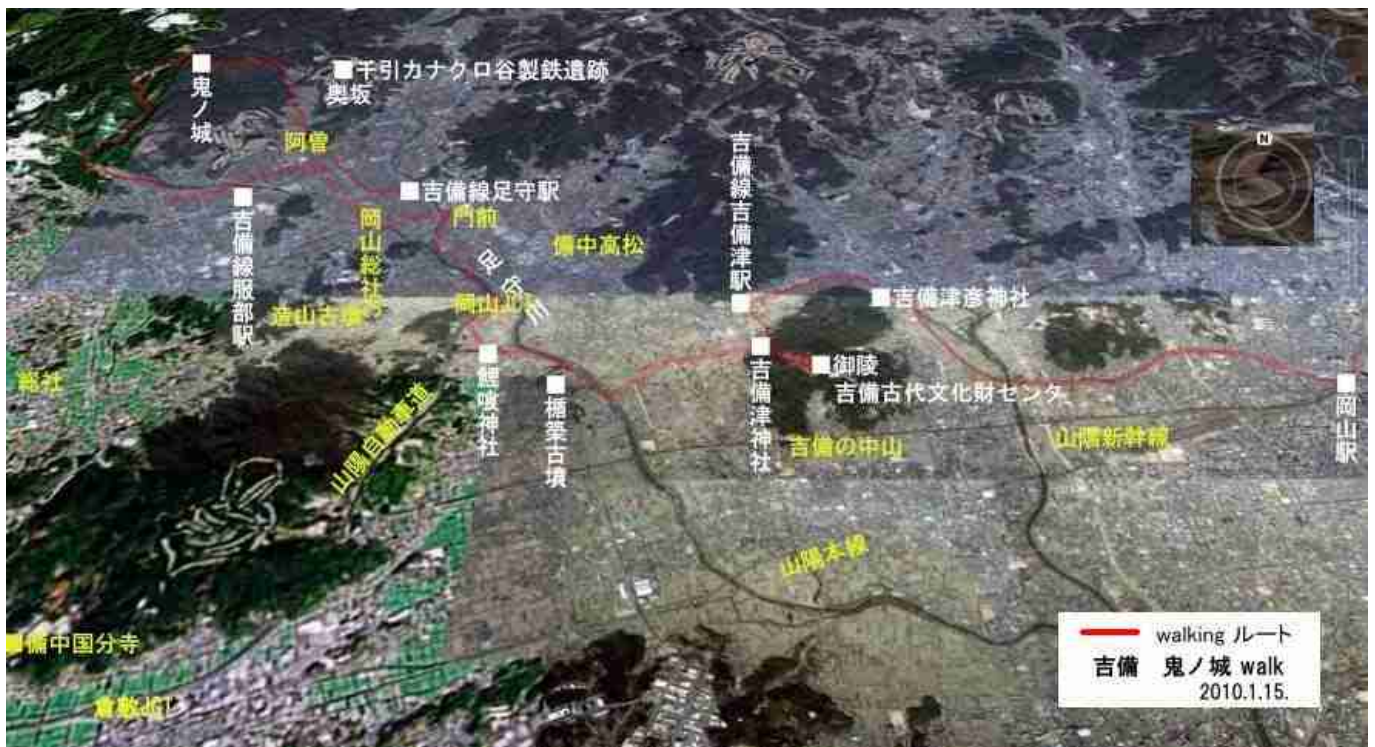


唐の侵攻に備えた古代7世紀の朝鮮式山城「鬼ノ城」の中に鍛冶工房があった



昨年 12月 岡山 鬼ノ城の中から 鍛冶工房が出土したと聞いて、久しぶりに整備が進んでいると聞いた「鬼ノ城」を訪ねました。「鬼ノ城」のある鬼城山は高さ 400m と低いのですが、吉備・総社の街の背後にそびえ、その山上部にある復元された楼閣がその下に広がる総社平野から見渡せ、桃太郎説話の元となった「鬼・温羅」の住処の伝説の地。そして その東山麓 血吸川が南に流れ下る阿曾の郷は「真金吹く 吉備」の古代吉備の製鉄の中心地であり、日本最古 6世紀の製鉄炉が出土した千引カナクロ谷製鉄遺跡が眠る地である。

この地で製鉄を始めた渡来製鉄集団が吉備を豊かにし、それを手に入れようとする大和との争いが「温羅」伝説となり、桃太郎の鬼退治伝説のルーツとする説もあり、この血吸川やその下流の足守川沿いから吉備の海岸線であった「吉備の中山」には点々とその伝説の痕跡が残っている。そして 吉備の中山には鬼退治をその後吉備を治めた吉備津彦を祭る吉備津神社・吉備津彦の墓との伝承がある御陵があり、吉備津神社には 境内お釜殿の下にうずめられた「温羅」の首が13年もの間うなり続けたとの伝承にルーツを持つ「お釜神事」が今も残る。

「吉備の中山から川沿いに温羅の痕跡をたどって、

整備の進む「鬼ノ城」とそこに出土した鍛冶工房跡を目指して歩こう。

また、鬼ノ城から直下の阿曾の郷にくだって

今はゴルフ場の下になっているという日本最古級の製鉄遺跡千引カナクロ谷製鉄遺跡の位置をしっかりと眺めたい。」

すぐにコースが頭に浮かんでくる。

鬼ノ城の鍛冶工房はすでに埋め戻しされているが、吉備の中山にある吉備古代文化センタに出土品の展示がされていると教え

てもらったので、これを見学して、鬼ノ城から阿曾に下る道・千引カナクロ谷製鉄遺跡の様子も教えてもらおう。

吉備の中山と鬼ノ城を結ぶのはちょっと欲張りの計画。 どうせ 鬼ノ城の登り口ビジターセンターまでの足がないので、どこかでタクシー頼めばよいと GPS を腰にぶら下げて 1日たっぷり、吉備の鬼を訪ねて歩きました。

コース概略は次のとおりです。

岡山駅→吉備線→吉備津駅→吉備津神社→吉備の中山→御陵・吉備古代文化財センター→吉備津神社
→ 総社への田圃の中のサイクリングロードを西へ足守川の土手へ walk
→ 足守川沿いを左に楯築遺跡 右に吉備の中山 北の鬼ノ城・阿曾の郷をめざして walk
→ 鯉喰神社→足守川土手→足守駅・門前集落→ タクシ →鬼城山8合目 鬼ノ城ビジターセンター
→ 鬼ノ城・鍵岩展望台→西門・楼閣→南門→東門→鍛冶工房跡
→ 東門→直下の阿曾の里へ下る→阿弥陀原・奥坂休憩所→血吸川沿いを足守駅
→岡山

【本・インターネット検索などで調べた参考解説】

1. 桃太郎説話の元となった「温羅」伝説

おかやま物語・総社市鬼ノ城・吉備津神社& 吉備津彦神社などの home page より整理転記

2. 奥坂製鉄遺跡群 千引カナクロ谷製鉄遺跡

「現在出土している日本最古後半の製鉄炉がある千引カナクロ谷製鉄遺跡」

光永真一著 吉備考古ライブラリー・10 「たたら製鉄」より 整理転記

3. 古代の山城 「鬼ノ城」で鍛冶炉跡が6基出土 大規模にこの山城で鉄器生産か

7世紀後半 663年 朝鮮半島白村江の戦いでの敗北から、唐・新羅の連合軍の本土侵攻する備えか

岡山県古代吉備文化財センター ホームページ ほかより整理

【参考 和鉄の道】

真金吹く吉備国 吉備の鉄 と桃太郎伝説 <http://buffalonas.com/mutsu/www/dock/iron/jstlbb11.pdf>



足守川土手より眺める 左:吉備の中山 右:鬼城山



1. 吉備の中山〔吉備津神社・御陵・吉備古代文化財センター〕 walk

吉備津神社の「鳴釜神事」 本当に釜が唸るのにびっくり 唸るのですね・・・



吉備津駅周辺より吉備の中山 右端にまっすぐ吉備津神社の参道が伸びる 2010.1.15.

1月15日晴れ 朝早く新快速を乗り継いで岡山へ。岡山で吉備線に乗り継いで東側からぐるっと吉備の中山を北に回りこんで、11時過ぎに吉備津駅で下車。駅のすぐ際の南側に吉備のシンボル「吉備の中山」があり、その中山に向かって、まっすぐ 松並木の参道が吉備津神社へ延びている。

吉備の中山へは吉備津神社へお参りして、その横から登る。何度か着たのでよく知った路たである。今日は 吉備古代文化センターで展示されている鬼ノ城鍛冶工房発掘で出土した異物展示をみることに「温羅」の首が埋められてうなり続けたという吉備津神社のお釜殿を見る事が一番。まず 吉備津神社へお参り。



吉備津神社 参道 2010.1.15.

吉備津神社は鬼退治をした吉備津彦を祭る神社。 また 境内にあるお釜殿では「鳴釜神事」が今も行われている。今日はこの「鳴釜神事」が見られるかもしれないと思いつつ鳥居をくぐる。

吉備の中山の山腹に本殿があるので 急な階段を登りきると広い境内の向こう山腹を背に社殿が建ち、社殿からは西へ緩やかなスロープで山腹に沿って回廊が西側山裾まで延びていて、下の境内にお釜殿が建っている。

中山への登り口はこの吉備津神社の西側に沿って車道が伸び、中山の山頂部を超えて東側山裾 同じく吉備津彦を祭り、備前の一宮吉備津彦神社へと延びている。この吉備の中山は備前と備中の境界にあり、吉備津神社は備中にある。

大化の改新の後 国が整備され、吉備が備前・備中・備後に分かれたときにそれぞれに吉備津彦を祭る神社がそれぞれ分社されたために、この中山に吉備津彦をまつる大きな神社が二つたっているというおかしなことになったようだ。
どうも ルーツはこの備中側にある吉備津神社らしい。 まずは 本殿でお参りして、お釜殿へ。



吉備の中山の山腹に建つ吉備津神社 本殿 2010. 1. 15.



吉備津神社本殿から西へ伸びる長い回廊 2010. 1. 15.

山腹にある社殿から長い回廊を通して西へ下った境の一角にお釜がある。

あの退治された「温羅」の首が吠え続けるので、このお釜殿の下にうずめたが、13年間も唸り続ける。
そしてある夜 吉備津彦命の夢に温羅が現れ、「わが妻・阿曾媛にお釜殿の火を炊かせば釜を喰らせてこの
釜で世の吉凶を占おう」といったので、そのお告げの通り
にすると、唸り声も治まり平和が訪れた。

あのお釜殿である。

そして 今もその「鳴釜神事」が行われているという。

回廊を降りて お釜殿へ向かうとラッキーなことにちょうど「鳴釜神事」の真っ最中。

この神事の間は吉兆を占ってもらっている人と神主・巫女(阿曾媛) 鹿は要れず、また お釜殿の内部は撮影禁止である。

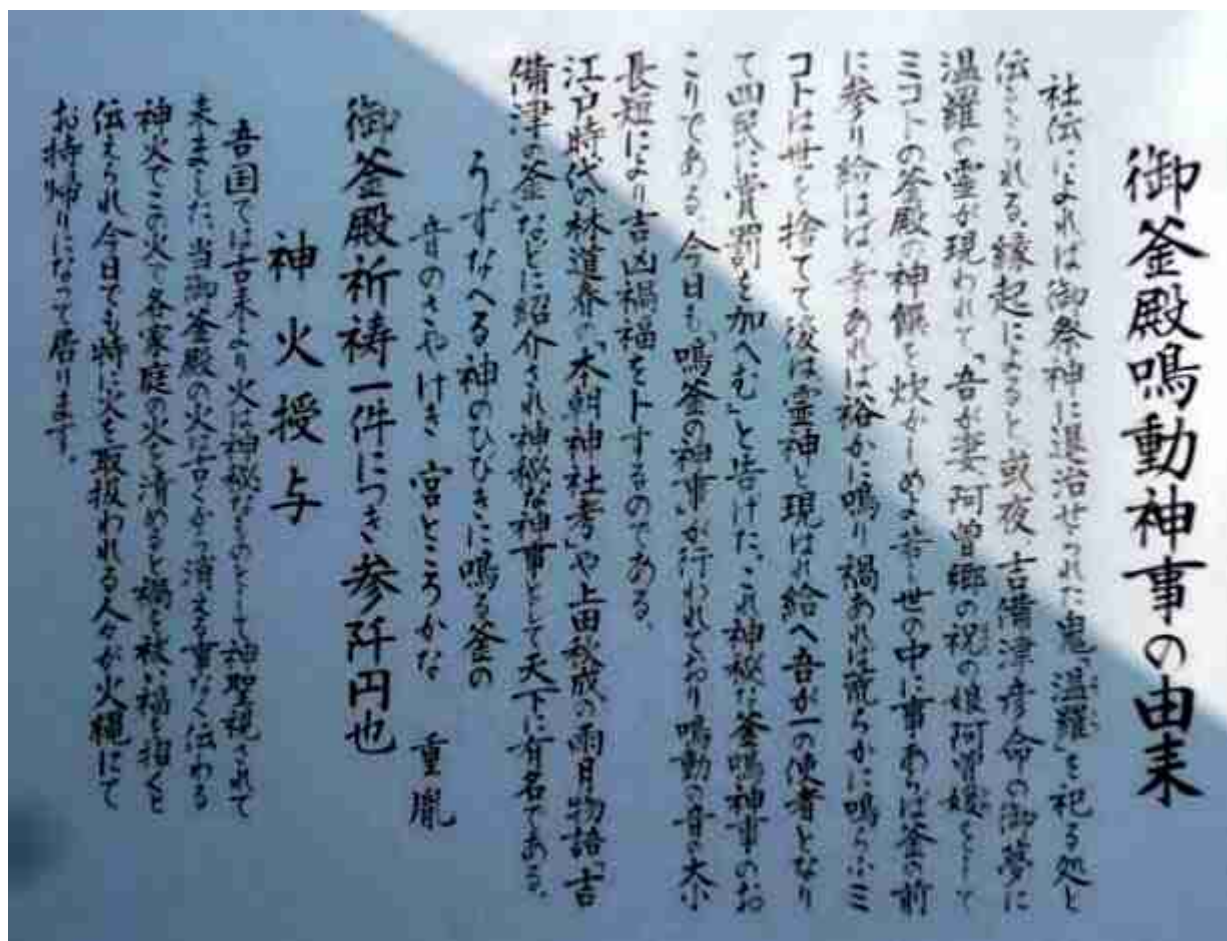
興味心身で入り口で神主が祝詞をあげるのを聞きながら待つ。





お釜殿 鳴釜神事で祝詞を奏上する神主さん 2010.1.15.

撮影禁止で撮影できなかったのですが、右写真は釜殿前に掲示されていた写真から採らせていただきました



御釜殿の前にある御釜殿 鳴動神事の由来を示す案内

耳を澄まして祝詞奏上を聞いていると 突然「ビ〜 ビ〜 ビ〜 」とお釜殿の中から音が聞こえだしました。

よもや・・・と本当に半信半疑でしたが、本当にびっくり。

周りの人に知らせてあげるとみんな半信半疑で聞き入っている。

本当にお釜が鳴るのです。(正確にはお釜の上で濛々と湯気をあげている蒸籠かもしれません)

そして しばらくして 音が鳴り止み鳴釜神事は完了。

今も「温羅」が唸っているのか?? そんなことはない。これは何か仕掛けがある・・・と。神事が終わって出てこられた神主さんに学生が内容を聞いているが、由来の話へ・・・



入り口で熱心に覗き込んでいる私を見ていて、お釜殿の中に残っていた巫女の婆さんに

「どうしてなのですか??? また 何かすると鳴り止むのですか・・・」と聞くと

「神主さんの祝詞奏上のころあいには 祝詞に合わせ 蒸籠の上に「玄米」を撒くと鳴りだし、しばらく鳴って鳴り止みます。

しかし、毎度毎度、その音の響きは大きかったり、小さかったり。 時には鳴らぬときも。

その唸りの音で吉凶を自分でえらなうのです」という。

なんか 油紙が蒸気で振動して 玄米が踊るのだろうか それなら 自然には止まらない。

でも 「本当にメカニズムを知らず 音を聞いて 自分で吉凶を判断する」というのがいいですね。

「温羅」が唸っているのでしょうか・・・

後日談ですが、家に帰ってインターネットなど調べると原理は「レイケ管」というらしい。

ほんとうかどうか 缶ビール3本呑んでつなぎ合わせてちょっと細工すれば

再現できるそうなので、実験して agree したらお知らせします。

「温羅」が唸るのを聞いた。 今日はこちらが一番の収穫。

興味津々だった鳴釜神事と鬼の怨念の唸りに一歩近づきました。



吉備津神社の境内を西へ出たところが、吉備の中山への登り口。車道が吉備の中山の反対東側の吉備津彦神社の方へ通じている。車道とほぼ平行して途中まで谷川沿いを歩くと本当に静かな散歩道を抜けて車道へ。

人も車もほとんどなく緑の木々の中を15分ほどゆっくり登ると山の鞍部。右に御陵への道・左の鞍部に吉備古代文化財センターで、そのまま文化財センターへ。



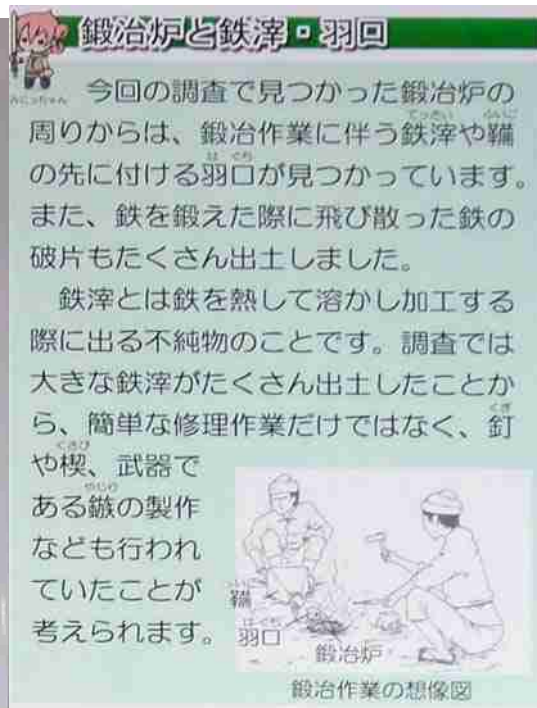
吉備の中山の登り口 道は東へ山を越えて吉備津彦神社へ

道のほぼ最高点周辺 左に御陵への登り口を分ける

吉備古代文化財センターは吉備の文化財の発掘調査・研究の中心的存在で、岡山県の製鉄遺跡・古墳などの資料をみせてもらったり、展示を見に訪れたことがある。今回の鬼ノ城鍛冶工房跡の発掘もここが手

がけ、出土した製鉄遺物を今月中展示している。
何か新しいものがあるかとも思いましたが、鉄滓と鍛冶炉羽口が少し展示してあるだけの小展示でした。

でも 朝鮮式山城であるが公式の記録がなく鬼ノ城の性格がはっきりしない中 大規模な鉄器製造の鍛冶工房を城内に持っていたことを考えると、やっぱり 7世紀 白村江の戦いで敗れ、唐の侵攻に備えた大和の国家的な城だったのだろう。



発掘の様子

羽口の残る鍛冶炉

吉備古代文化財センターに展示されていた鬼ノ城 鍛冶工房跡で発掘された遺物 2010. 1. 15.

学芸員の方に現地説明の資料をもらうとともに、鍛冶工房遺跡の位置を教えてもらった。

やっぱり 埋め戻されているが、鬼ノ城東門のすぐ上で、城壁回遊路から見られることがわかりました。

また一番心配だった鬼ノ城からまっすぐ奥坂製鉄遺跡群のある直下の阿曾の郷への道についても、登りはきついので進めないが、東門から崖道であるが、しっかりした道が郷までついていると。

これで決まり。はじめ 山の東側 阿曾の里から登るほうが効率がいいと思いましたが、足守川沿いを歩いて どこかでタクシーを呼んで 西側の鬼ノ城の西側のビジターセンターから登り、阿曾の郷へ降りようと。

吉備津から吉備線で服部駅まで途中カットすれば 楽勝なのですが、やっぱりのんびり郷歩きもしたいと。

まあ どないかなるやろうといつもの walk。 ちょっと下って 御陵の登り口へ

御陵は東側の山の頂上部にあって、延々と階段が続き、上りきった尾根の上に御陵がある。

吉備津彦の墓との説があるため、宮内庁が管理していて、山の上よく整備管理されている。



御陵へ登る階段



階段を上りきった尾根の上に御陵がある

御陵からもと来た道を吉備津神社の横まで下り、北の吉備線吉備津駅の方には行かず吉備路・総社へのサイクリングロードを吉備の中山に沿って西へ集落を抜けると一編に広大な田園地帯に出る。 山がない平地 おそらく昔は海か湿地が広がる海岸地帯だったのだろう。田圃の中をまっすぐ西へ足守川へ向かう。

鬼ノ城で敗れた温羅が血吸川の川筋へ逃げ、さらに鯉となって逃げた下流の足守川である。また 温羅と戦う吉備津彦がこの中山に陣を引き、西の足守川の際に石の楯を築いたとの伝承が残るのが楯築遺跡である。

この楯築遺跡は大和が前方後円墳を築く先駆けモデルとなったと考えられる遺跡で川岸の丘に巨大な石がいくつも残っている。



吉備の中山の西には 足守川まで広大な田園地帯が広がり、振り返ると吉備の中山 鬼の城はずっと北の方である

2. 足守川の土手を北へ鬼ノ城へ向かって walk



吉備の中山の西の田園地帯から鬼城山を眺める 随分向こうに見える 2010. 1. 15.

誰も居ない田園の中を西にぶらぶら歩いて足守川へ向かう。ぶらぶら田園の中 さえぎるものがないので随分冷たい風が吹く。また、地図ではたいしたことはないと思っていましたが、鬼ノ城の山並みはずいぶん向こう。これは遠いなあ・・・・・と。

30 分ほどで北の鬼城山から流れる血吸川を合流して、南に流れ下ってきた足守川の日畑橋に出る。次の目標はここから足守川を北にさかのぼって、鯉となって血吸川



から足守川に逃げ下ってきた温羅が鵜となって追ってきた吉備津彦に捕まって退治されたという鯉喰神社。そこからさらにまっすぐ川沿い北に行けば鬼ノ城である。

上流側すぐ西側に楯築遺跡の森がみえるが、今日は土手を下りて、楯築遺跡に入ってゆく時間はなさそう。

吉備と大和の前方後円墳を結びつけることは知っていましたが、温羅の伝説に登場しているとは頭にありませんでした。随分奇妙な巨岩が古墳の上にあり、面白い遺跡とは思っていましたが、吉備の中山に陣を引いた吉備津彦が楯として築いた場所。楯築遺跡の名はこれと気がつく。川を挟んで吉備の中山はすぐ向こう。北には遠く鬼城山が見える。時間は1時過ぎ。鬼ノ城 そして阿曾・奥畑に行くには急がないと。

少し北に進んで、吉備の中山と鬼城山を足守川を入れてとり、先に進むことにする。



足守川 日畑橋より北 鬼城山を望む 左手の森が楯築遺跡

2010. 1. 15.



楯築遺跡の北周辺 足守川土手より 東側 吉備の中山 2010. 1. 15.



山並みの中央部 稜線のすぐ下にぽつんと白い線が見えるのが鬼ノ城

楯築遺跡の北周辺 足守川土手より 北側 鬼城山 2010. 1. 15.

ほとんど車も通らず、気楽な散歩。 鯉喰神社はすぐ北側の橋の向こうの丘のあたりである。

サイクリングロードの標識が濃喰神社の近いことを示してくれる。 向こうに見える橋矢部橋を渡ってすぐに土手を降りて集落に入る。両側に家が立ち並ぶ間を抜けると小さな神社がかぎ状の道の右手に見えた。これが鯉喰神社。そして 道はこの神社の横を通り、集落を抜けてゆくのですが、地図を見る山陽道の表記がある。吉備の中山から山陽道が西へどう続いていたのか判らぬが、吉備線が通る北の山すそをグルリと弧を描くのが海岸線だったのだろうか・・・そうすると今通ってきた広大な田圃は海・そして芦原だったのか・・・。



正面土手の下 鯉喰神社のある矢部集落 2010. 1. 15.

この干拓にも奥坂の鉄が使われたのか??? 勝手な想像を膨らませながら、鯉喰神社の由来の案内板を眺める。やっぱり伝説の残る古い土地なのである。



矢部の集落の中 鯉喰神社前を足守川土手から西へ抜けてゆく旧山陽道??? 2010. 1. 15.



鯉となって足守川を逃げ下ってきた温羅が捕食された伝承の地 鯉喰神社 2010. 1. 15.

1 時 3 0 分を回って、もうタイムリミット。このまま歩くと鬼ノ城の鍛冶工房跡から奥坂へ下れなくなる。タクシーと呼べるところがないかと土手を歩きながら探す。どうも やっぱり吉備線の備中高松か足守駅の方へ行かないとその便がないらしい。このまま足守へ急ごうと川沿いを急ぎ足。

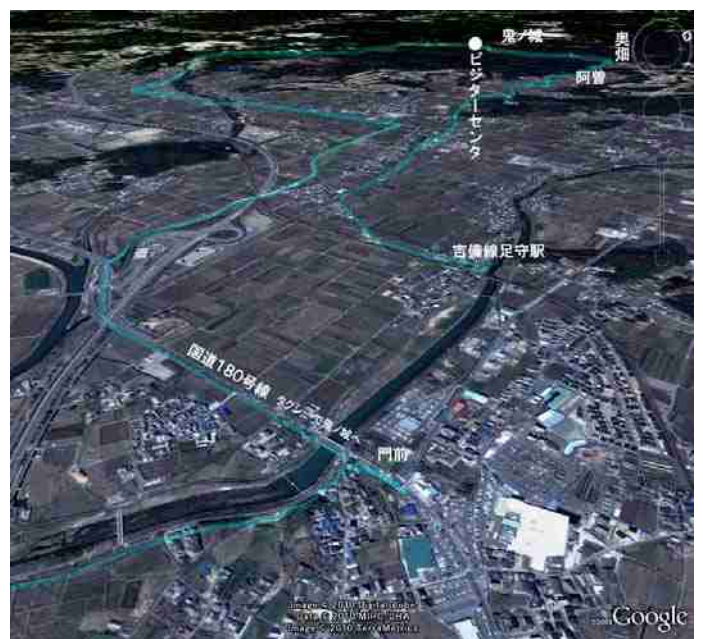
足守川の川傍でループを描く山陽道の岡山 JCT の高架橋をくぐるがまだ遠い。集落もなく国道 1 8 0 号線が走る川の東側にトラバースして、足守駅を目指す。

正面に川を渡る国道 1 8 0 号線が見え、右手に国道筋に店舗がたっているのか見え、地図から門前の集落とわかる。

ちょうど 2 時 橋のところで右手の国道へ折れ、大きなガソリンのサービスステーションに飛び込みタクシーを呼んでもらった。(帰りに足守駅から吉備線にのりましたが、集落のはずれの田圃の中の駅で good な選択でした。)

サービスステーションの人と談笑して一息入れる。 時間があれば、そのまま鬼ノ城へ歩こうと思ったというもまだ 1・2 時間では行けぬと笑われた。

やれやれで、こちらからは鬼城山裾をぐるりと向こう側へ出て、谷筋を鬼城山の 8 合目のビジターセンタまでタクシーで登って鬼ノ城をめぐる。



タクシーに乗り継いだ岡山市北区門前地区周辺

3. 7世紀 唐の侵攻に備えた朝鮮式山城 鬼ノ城 & 鬼ノ城鍛冶工房跡を訪ねる



足守駅の南側 門前からタクシーで鬼城山の南側がらぐりと西側の谷筋に回りこんで、山の8合目ビジターセンターのある鬼ノ城西門への入り口まで約20分ほどで運んでもらった。鬼ノ城へは数度上って来たことがあるのですが、もう10年ほど前。それから発掘調査ならびに鬼ノ城諸施設の復元整備が進んでいると聞くので楽しみ。

午後2時半。この時間ならゆっくり鬼ノ城を歩いて鍛冶工房跡を見学してから吉備古代の製鉄の中心地だった東の奥坂へ下れる。



ビジターセンターへ行って

鬼ノ城への西側からの登り口 鬼ノ城ビジターセンタと西門への登り道

一番心配だった東へ下る道を再度教えてもらい、今回ぜひ見ておきたい鍛冶工房跡の位置を確認する。

鬼ノ城は眼下に古代吉備の中心地総社平野を見下ろす高さ約400mの険しい山腹を持つ鬼城山の8合目周辺を鉢巻状に土塁や石垣で取り囲んだ山城。城壁の長さは約2.8km 囲まれた城内約30.6ha。城壁の東西南北4ヶ所には城門があり、雨水を場外へ排出するための水門が6ヶ所もうけられ、城内の中心部には礎石建物が7棟確認され、東門の上の小さな谷筋には鍛冶炉11ヶ所が発掘されている鍛冶工房が確認されている。

山を鉢巻状に土塁や石垣で取り囲み、内部に建物を配置する構造は古代朝鮮半島の様式を色濃く持っており、663年の白村江の敗戦後、朝鮮からの来襲をおそれた日本政権が国土防衛のため亡命百済人の指導で築造した朝鮮様式の山城とみられている。

しかし、公式的な記録はなく、この山城の正確については不明な点が多いが、今回大規模な鉄器製作鍛冶工房が城内にあったことから、やっぱり白村江で破れた大和が唐の国内侵攻を恐れて築城した山城の性格が強い。

また、「鬼ノ城」の名が示すとおり、山城が築かれる前から険しい山であるこの地は要害の地として、「温羅」の城であったとの伝承が残る。この山の東山麓は急峻な崖に鳴っているがその麓 奥坂は「真金吹く吉備」の古代製鉄の中心地で渡来の製鉄鍛冶集団が居た場所。この奥坂で作られた鉄が山の上の鍛冶工房で鉄器に加工されたのかも知れぬ。鬼ノ城と古代吉備の製鉄の中心 奥坂を結ぶ鬼ノ城鍛冶工房の出土であり、「鬼・温羅」にされたこの奥坂の製鉄集団の重要性が温羅伝説ばかりでなく現実味を帯びて浮かび上がってきたといえる。

そんな奥坂製鉄遺跡群の中に日本最古の千引カナクロ谷製鉄遺跡がある。今は鬼ノ城 GC の池の中に眠っているというが、どんなところなのか知らなかった場所。今回はぜひ見下ろせる鬼ノ城からその場所を確認したい。

登り始めてすぐのところを南へ折れると鬼ノ城の外観や眼下に広がる総社平野が一望できる展望台が整備されていて、ここからは復元された西門がよく見える。

遠く総社の街から山の上に見えていた西門が本当に天然の要塞急峻な崖の上に建っているのがよく判る。

じっと時代を下った城郭の石垣と見間違えようのないしっかりした石垣の上に楼閣が載った西門。これが朝鮮からの渡来人たちの技術。また、この石の切り出し、山の上で組み立てるには本当に数多くの鉄製工具が使われたに違いない。

大和・飛鳥のイメージからすると本当にかけ離れた技術のレベルにびっくりする。

タクシーで登ってくると何のありがたみもないが、こうしてみるといまさらながら総社平野を見下ろす鉄壁の要塞だと。



鍵岩展望台からの鬼ノ城概観と総社平野展望 2010. 1. 15.



元の道にもどって、良く整備された遊歩道を少し登るといよいよ鬼ノ城の西側城壁である。

まもなく分岐になり、左手に登る道には四角の石組みの上に板囲いされた建物。 まっすぐ前方には西門の大きな楼閣が見える。

西門の方へ行けば、城壁を南側からめぐる道 左手を執れば鬼ノ城の上方の中心部や北の城壁をめぐる道。 今回は南側から東門へめぐりたいが、復元された四角い板囲いの建物と石組のすばらしさに興味深々でまずそこへ行く。



鬼ノ城西南側角の城壁にある左:角楼と 右: 西門 2010. 1. 15.



角 楼 跡

かつてここには、裏門的な門跡の存在が推定されていたが、平成8年度の発掘調査で城門ではなく、特殊な遺構であることが判明。

ここは、南北両方から入り込んだ谷の頭部にあたる背面側の要地で、正面側約13m、奥行側約4mが前方へ突出した長方形の張り出し部が、城壁に付設されている。

張り出し部の下部は、推定高さ約3mの石垣とし、その上部は土積みであったようで、張り出し部の本来の高さは約5m以上と推定される。石垣の間にはほぼ4m間隔で、一辺約50cmの角柱が立つ。

張り出し部の外側には、通路のような幅1.5mの敷石が巡っており、また、城内側には角楼への昇降のための石段もつけられている。

張り出し部をもつこの遺構＝角楼は、背面からの攻撃に備えるとともに西門防備をも意図した重要な防御施設と考えられる。なお、角楼の存在、石垣の間に立つ柱、敷石が巡っていることは、日本の古代山城では初の発見例である。

総社市 案内より

【 復元された西門 】



西門跡

鬼ノ城は、四カ所に城門を設けています。

いずれも掘立柱の城門で、通路床面に大きな石を敷き、床面と城門前面に2m近い段差を持つ(懸門)ことを特徴としています。

西門は、南門と同規模の大型の城門で間口3間(12.3m)、中央1間を通路とし、2間の奥行をもち、12本の柱で上屋を支えます。柱は一辺最大60cmの角柱を2mほど埋め込んでいます。

本柱に合わせたくり込み、方立柱穴、軸据穴、蹴放しが一体的に加工された門礎をもつのは、鬼ノ城のもののみです。

西門は日本最大の古代山城大野城の大宰府口城門(開口8.85m)をしのぐ、
 壮大堅固な城門です。

平成15年3月

總社市教育委員會



西門の復元

西門陣は、きわめて良好な状況で残っていました。

12本の柱の位置と高さ、隙のにおよんだ深さ、各柱間の寸法も正確に知ることができ、また通路表面の石敷や石段、敷石もよく残っていたので、城門の規模と構造を具体的に知ることができた。

そこでこれらの資料をもとに、関連資料を参考に、戦前の場としての機能を考慮して三階建ての城門に復元しています。一階は通路、二階は城壁上の通路、三階は見張りや城門の場としての機能をもつものです。屋根は調査時には見出ましていないので、仮定としては出ます。

古式山城の城門の遺存例としては、

復元された西門 2010. 1. 15.

古代というと木造建築をイメージするのですが、渡来人の手を借りたとはいえ、日本にもこんな強固な石造建築物があったことにびっくりである。

西門に続く城壁は土塁で表面にはびっしり四角の切石が敷き詰められ、城壁の下には城壁に沿って敷石が敷かれた道が続いている。眼下には今日歩いてきた足守川沿いの総社平野が遠望できる。



調査後の城内側敷石

敷石

鬼ノ城では、城壁の下面に接して板石を多数敷きつめています。幅は基本的に1.5m幅で、城内側の広い所では5m幅にもなる所もあります。

敷石は多くの区間に敷かれており、総重量は数千トンにもなります。

この石畳のような敷石は、通路としての役わりもあるものの、敷石の傾斜などからみて、もともとは雨水等が城壁を壊すのを防ぐことを目的としたものと考えられます。

敷石は、日本の古代山城では鬼ノ城にしかなく、朝鮮半島でも数例知られるだけの珍しいものです。

とくにこの区間の敷石は、鬼ノ城でも見事なところ です。

平成21年3月

総社市教育委員会

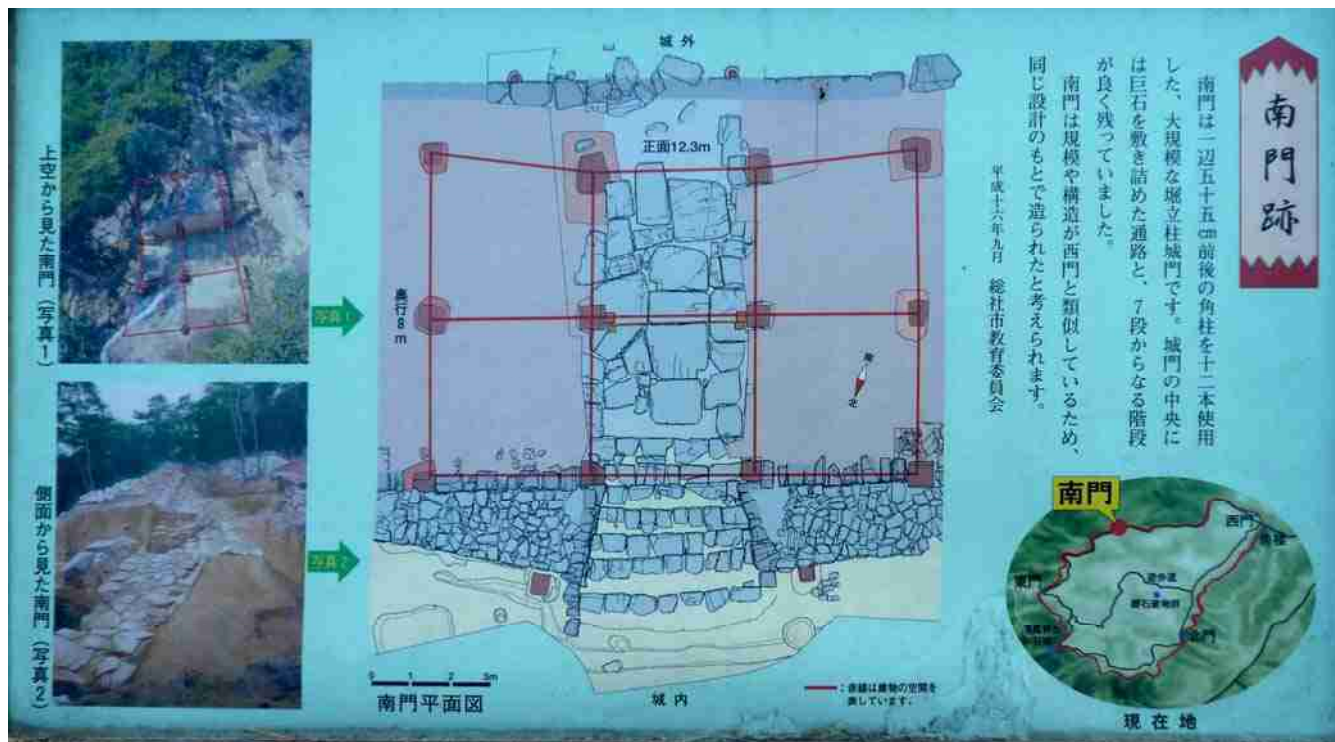
西門からこの敷石が敷き詰められた道の端のところから城壁の南側をめぐる道となり、東門へ向かう。
記憶にある山道からは本当によく整備された道が城壁をめぐるっている。



山の南側をめぐる城壁沿いの道が山腹を巡る 2010. 1. 15.



鬼ノ城 南門 2010. 1. 15.



南側山腹をめぐる城壁 第三水門周辺 2010. 1. 1



南側城壁の最南部突出部 眼下に 鬼ノ城の東側 奥畑のゴルフ場が見え出す 2010. 1. 15.



「屏風折れの石垣」



東門周辺

突出部より 東側を巡る城壁 上方に「屏風折れの石垣」 右手に東門が見える 2010. 1. 15.



突出部を回り込んだところの大きな岩に刻まれた観音様「岩切観音」 2010. 1. 15.

岩切観音を過ぎるとすぐのところに左手へ城の中心部へ登ってゆく道と城壁を巡る道との分岐点。

城壁をめぐる道はちょっと降り道となって東門へ向かう。

降りきったところが小さな谷になっていて、ここにも水門がある。この水門から続くなだらかな登り道の向こうが平坦な突端部になっているのが見え出し、そこが東門のある突端部だった。

西門からぶらぶら城壁の南側を巡って 30分ほどで東門にいたった。多少上り下りがあるが、よく整備された回遊路なのでほとんど平坦地を歩いている感じである。

東門からはこの鬼ノ城の東山麓に広がる奥畑・阿曾の集落が手に執るように見える。また、鍛冶工房遺跡はこの東門の上方に延びる尾根一帯に広がっていたという。突端をくると先に回ればそこから 今はもう埋め戻されているという鍛冶工房跡が見えると聞いた。 また 眼下に広がる奥畑一帯は古代の製鉄地帯 ぜひ 日本最古の製鉄遺跡である千引カナクロ谷製鉄遺跡の場所をここから特定したい。



北の城内中心部へ登る道と城壁をめぐる道との分岐

2010. 1. 15.



南側城壁 第四水門



東門のある突端が見えてくる



鬼ノ城 東門跡 2010. 1. 15.



鬼ノ城 東門 眼下に広がるゴルフ場周辺が奥坂 古代吉備の中心的製鉄地帯である



東門跡（旧第一城門跡）

鬼ノ城には、東、西、南、北門の四つの城門があります。東門跡は平成六年度に、鬼ノ城で最初に発掘調査された城門跡で、その後の城門の調査に多くの手がかりを与えてくれました。

城門は堀立柱式で、柱は四本確認されていますが、他の城門の構造からみると六本柱であった可能性が考えられます。扉の取付く本柱は、大きな石の部を弧状に加工していることから直径六〇センチの、丸柱であったことが判ります。間口三・三メートル、奥行き一・七メートル、扉間口は一・四メートルあります。通路部の壁面は板壁であったと考えられます。門を入ると両側には扇状に開く石垣があり、正面には大きな自然の岩が入城をはむかのよに横たわっています。城門の両側の土塁には、約二メートル間隔で計五本の柱穴が確認されました。城門の防備を意図した柵かと考えられます。東門の本柱は丸柱ですが、他の三つの城門は角柱であり、また、角楼の石垣の間に立つ柱も角柱です。この丸柱と角柱の違いが何を意味するのかが不明ですが興味ある課題といえます。

総社市教育委員会



● 鬼ノ城の鍛冶工房跡



今回出土した鬼ノ城の鍛冶工房の位置は吉備古代文化財センターやビジターセンターで確認してきたが、東門から上へ伸びる小さな尾根筋に沿って損ざし、3箇所が発掘され、11基の鍛冶炉と羽口や大量の鉄滓・砥石・土器などが出土。7世紀の鬼ノ城鍛冶工房である。「東門から突端部をくると回り込んだところまですめば、中に入れないが、すでに埋め戻された鍛冶工房跡が見られる」と教えてもらったが、そのとおり、道の向こう左手に立ち入り禁止の綱が張られた日細長い平地が林の中に納まっていました。ちょうど東門からまっすぐ上へ上った尾根筋である。



突端を左へ曲がってすこしすすむとロープが張られた場所が左手に見え、それが鍛冶工房跡でした



立ち入り禁止のロープのところから見た鍛冶工房跡 左手 南の東門側から右手北の小さな尾根筋南北に広がっている



立ち入り禁止のロープのところから見た鍛冶工房跡 全景

2010. 1. 15.



埋め戻された遺跡跡の周囲にロープが張られていて中に入れないので詳しいことは良くわからないが、雑木林の向こう側がすいて見え、向こう側が小さな谷になっていて南から東へならかなスロープで尾根筋に鍛冶工房があったようだ。教えてもらったマップにはさらにこの尾根筋の上にも鍛冶工房跡があるようですが、そこへは行かずでした。この位置は東門の真上に当たるので、東門へ戻って東門の真上の大きい岩を登って、雑木林に入ると縦にこの鍛冶工房跡を縦に見られました。



南側の端からみた鍛冶工房跡

2010. 1. 15.

時間切れで今日は鍛冶工房跡が見られるだろうかとちょっとあせりましたが、鬼ノ城の鍛冶工房跡が見られて満足。

東門の上の巨岩の上にどっかり座って、眼下に広がる奥坂・阿曾の郷を眺めながら、インターネットで採取したこの鍛冶工房遺跡の発掘の様子や発掘現地説明会の資料をもう一度眺める。



東門の真上から眺める奥坂・朝の郷 2010. 1. 15.

見降ろす奥坂は吉備の古代製鉄の中心地。 この奥坂で作られた鉄がこの鍛冶工房で鉄器に加工されたのだろう。

663 年朝鮮半島白村江の戦いに敗れた大和が唐の侵攻を恐れ、この巨大な山城をつくり、戦いに備えた。

この巨大な山城の石組みや城壁をみると巨大な石の切り出し・加工などこの城の建設には多数の鉄の工具の調達なくては成し遂げられなかったろう。 また、唐の侵攻に備えた鉄器もこの鍛冶工房で準備したのだろう。

この山城には諸説があるが、城内に大規模な鍛冶工房をそなえてきたことは、この城が当時大和の最大の敵 唐への備えであったように思う。

また、鉄の需要も急激に高まり、6世紀にはじまる日本の製鉄もその品質・安定増産が大きな課題になっていたに違いない。 そんな時代の要請に 奥坂はじめ「真金吹く吉備」の製鉄は十分に答えられたのだろうか・・・

唐の侵攻におびえた大和は北九州から瀬戸内沿岸に大規模な土塁・山城を張り巡らし、近江の勢田丘陵や九州福岡の元岡には、大型の量産型製鉄炉が立ち並ぶ大製鉄コンビナートを作り上げて行く。

吉備の「鬼ノ城」もこんな大和政権の動きに組み込まれた山城・鍛冶工房だったのだろうと思いをめぐらす。

鬼ノ城鍛冶工房跡発掘の状況については、下記 吉備古代文化財センターのホームページに生のデータとして掲載されているので、そちらを参考にされたし。

また、吉備古代文化財センターのホームページなどから採取した記事をベースに下記にその概要を整理転記しましたので、参考にしてください。

○ 古代の山城 「鬼ノ城」で鍛冶炉跡が6基出土 大規模にこの山城で鉄器生産か

7世紀後半 663 年 朝鮮半島白村江の戦いで敗北から、唐・新羅の連合軍の本土侵攻する備えか

[岡山県古代吉備文化財センター ホームページ](#) ほかより整理

● 古代日本最古の製鉄遺跡 千引カナクロ谷製鉄遺跡の位置を眺める



今回 鬼ノ城へ登るもうひとつの楽しみは日本最古の製鉄遺跡「千引カナクロ谷製鉄遺跡」の場所の特定。なんとといっても現在 発掘調査された日本最古 6世紀の製鉄炉が確認された遺跡である。鬼ノ城東山麓の奥坂に広がる鬼ノ城 GC の中にある調整池の底に眠っているとは聞くのですが、どんなところなのか知りませんでした。

鬼ノ城からは眼下に奥坂・阿曾の郷が一望できるので、その特定ができる。

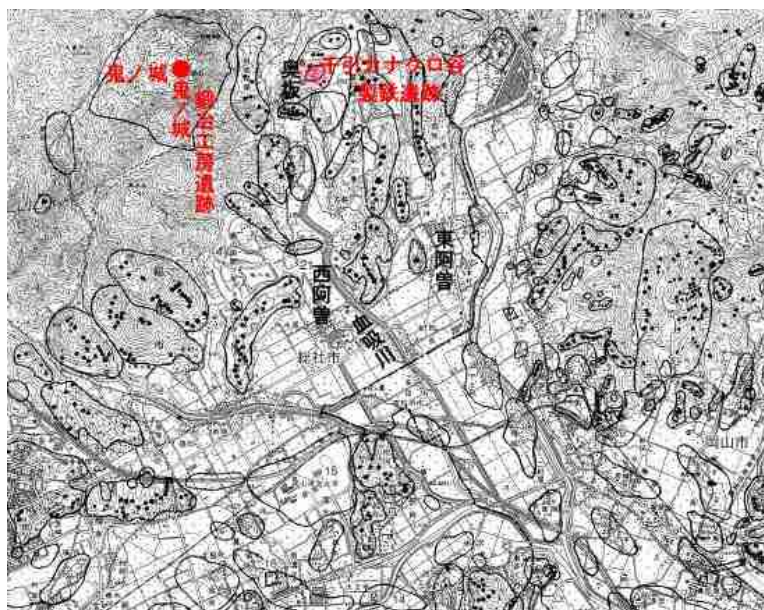
頼りは線引カナクロ谷製鉄遺跡の位置が帰されているのを見つけた総社市の周辺遺跡地図。

吉備線服部駅の南にある総社市埋蔵文化財学習の館にゆけば、千引カナクロ谷製鉄遺跡の模型などが展示されていて情報が得られると聞くのですが、今回も訪ねられなかったので、この遺跡図だけが頼り。

東門の横に座り込んで、現在の地図と遺跡図そして磁石を並べる。奥坂はゴルフ場の真っ只中。そして いくつも池が見えるのでどれだろうか・・・本当に東門の真正面 ゴルフ場のど真ん中の池が千引カナクロ谷遺跡でした。

幾条にも南北に並ぶゴルフコースから想像すると幾重もの小さな尾根筋が並び、その尾根筋で古代点々と製鉄が始められたに違いない。

温羅の伝説・朝鮮式鬼ノ城など朝鮮半島の影響が色濃く残る奥畑の製鉄遺跡。やっぱり 朝鮮半島の渡来の集団なのかもしれない。その原料が鉄鉱石であることもその痕跡かも知れぬ。



やっと 出会えた日本最古の製鉄遺跡 千引カナクロ谷製鉄遺跡である。



千引カナクロ谷製鉄遺跡については 光永真一著 吉備考古ライブラリー・10 「たたら製鉄」に記述されているので参考にされたし。
また、上記資料などより整理転記して、下記資料に概要を取りまとめましたのでご参照ください。

○ 奥坂製鉄遺跡群 千引カナクロ谷製鉄遺跡

「現在出土している日本最古後半の製鉄炉がある千引カナクロ谷製鉄遺跡」

光永真一著 吉備考古ライブラリー・10 「たたら製鉄」より 整理転記



15時30分 東門から先に見えている屏風折れ石垣の展望台の方まで行きたいのですが、東門から東の奥坂へまっすぐ切れ落ちて崖の登山道を下りたいので時間切れ。東門の突端部にある阿弥陀原登山道の道標の矢印に従って崖を下る。

4. 古代の製鉄地帯 奥坂・阿曾に下って 血吸川に沿って足守駅へ



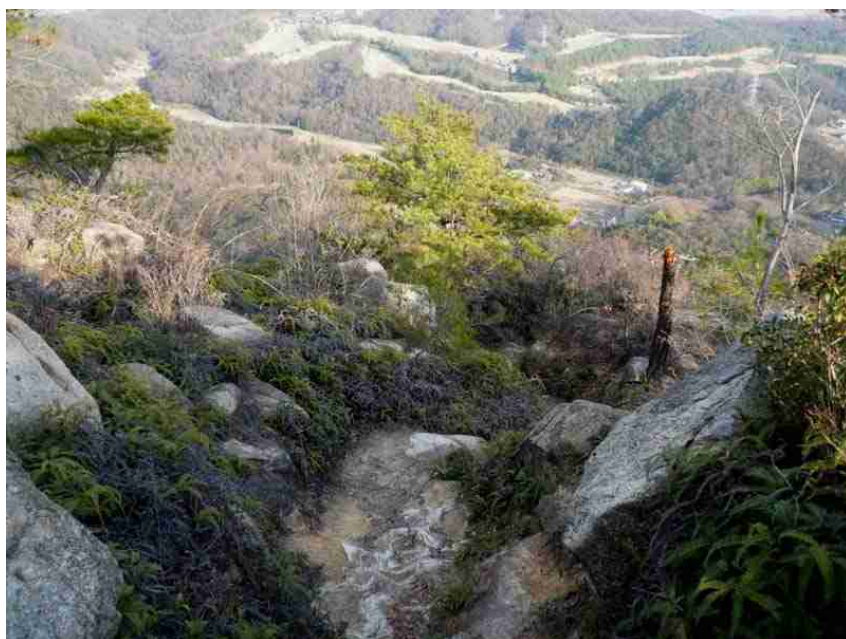
東門の突端部の先端のところに阿弥陀原登山道の矢印あり、下方の崖に急降下の道がついている。

城壁の下へ降ってゆくのだから当たり前なのですが、東門のある急勾配の尾根筋。

ビジターセンターでもらった地図では7分ほどで山麓の奥坂・阿弥陀原に下れると帰されているが、若者でもそれはない。

なんせ ハンググライターの飛び出し口といったところをまっすぐ下ってゆく。

正面に千引カナクロ谷が眠る鬼ノ城 GCの池が真正面。鬼ノ城が築かれた時代にもこの道は隠れ道として存在したのだろうか・・・。



そんなに長い時間ではありませんが急降下の道が続き、慎重に足場を確認しながら下ってゆく。

鬼ノ城東門から阿弥陀原・奥畑へつづく登山道の降り 2010. 1. 15.





左手には急峻な崖の上に続く鬼ノ城の城壁が見える



南側には 足守川が流れ下る総社平野



阿弥陀原登山道から見える血吸川が流れ下る奥畑・阿曾の郷 2010. 1. 15.

10 分ちょっと崖を下りきると道はやっと緩やかになり、はやしのなかをくだって、30 分ほどで、麓の阿弥陀原の T 字路に出る。北へ行くと鬼城山の北側を巻いて岩屋集落へ右手の南へ行くと奥坂休憩所から阿曾の郷血吸川沿いに出る道である。



崖道を下りきるとなだらかなくだりとなって まもなく阿弥陀原の郷道との T 字路

鬼ノ城の東門から 30 分ほどで展望が利く広場奥坂の休憩所に到着。

今降りてきた鬼ノ城が集落の後ろにそびえている。この郷からみると本当に鬼ノ城がこの奥坂の郷を守る砦であるとの感じがする。

冬の夕暮れは早い。ここから温羅が逃げ下ったという血吸川の流域へ出て、流れに沿って吉備線足守駅まで1時間ちょっとあるかねばならない。

地図を広げると 鬼ノ城野山の反対東側の雑木林に包まれた小高い丘が古代奥坂製鉄遺跡群のある鬼ノ城 GC であるが、こちらからは行けない。ちょっと下ると血吸川が流れ下る平地部の里に出られ、そこから奥坂全体の姿が眺められるだろう。



奥坂の郷にある鬼ノ城への登山口 奥坂休憩所 2010.1.15.





血吸川の土手から奥坂の集落を眺める
2010. 1. 15.



血吸川の土手から奥坂の集落を眺める 右端 奥に古代奥坂製鉄遺跡群が眠る 2010. 1. 15.



血吸川の土手に沿って足守駅ちかくまでくるともうすっかり夕暮れ。西に夕日が沈むのが見られました。
夕日を眺めながら 一日をふりかえりつつ足守駅へ
18時6分初の吉備線岡山行きで帰路に着く。 満足の吉備鬼の痕跡をたどる鬼ノ城walkでした。

5. 桃太郎伝説の吉備路 walk 「鬼ノ城」を訪ねる 総括



「桃太郎説話の鬼・温羅」の城との伝承があり、また、7 世紀 百済救援のため、朝鮮半島白村江の戦いで破れた大和王権が唐の日本侵攻を恐れて築いた古代の山城と見られる吉備 総社の街の背後にそびえる鬼城山「鬼ノ城」の山上の城内から大規模な鍛冶工房が出土したと聞いて、桃太郎説話のルーツ温羅伝承の痕跡をたどりながら、一日吉備路を歩きました。温羅伝承の背景には「真金吹く吉備の中山」と歌われた古代の大製鉄地帯「吉備の鉄」を巡る争いがあるとの説もあり、「鬼ノ城」の直下 東山麓の奥畑・阿曾の郷は古代 吉備の製鉄地帯の中心地。ここからは 6 世紀後半 日本最古の製鉄炉が出土した千引カナクロ谷製鉄遺跡が眠っている。

以前に何度か吉備・鬼ノ城を訪れたことがあるのですが、発掘調査が進み、城内の諸施設が復元整備された鬼ノ城を見るのは初めて。また、鬼ノ城と直下にある古代の奥畑製鉄遺跡群の関係も知りたいし、奥畑・阿曾の郷にも足を踏み入れたいと。ちょっと欲張りな吉備路 walk なのですが、温羅伝承の痕跡をたどりながら、吉備津神社のある吉備の中山から足守川・血吸川沿いを鬼ノ城まで歩きました。

よく知っているつもりでしたが、やっぱり歩くと新しい発見ばかりで 本当にびっくり。

吉備の鬼と古代製鉄の関係は知っていましたが、あの巨大な石組みが山上に続く山城とその城内の大規模な鍛冶工房とそのすぐ麓に広がる製鉄地帯をみると 古代大和政権にとって 吉備が本当に重要拠点であったことが、いまさらなら実感されました。そして、位置関係が良くわからなかった日本最古の製鉄遺跡 千引カナクロ谷製鉄遺跡の位置が確認できたことも収穫。



鬼ノ城・城内の鍛冶工房跡と出土した羽口・鉄滓

また、びっくりしたのは今回 初めて そばに居て見ることができた吉備津神社お釜殿の「鳴釜神事」。
退治された温羅が埋められたお釜殿の下で13年間も唸り続け、退治した吉備津彦の夢に現れ、「わが妻・阿曾媛にお釜殿の火を炊かせば釜を唸らせて世の吉凶を占おう」といい、そのお告げの通りにすると唸り声も治まり平和が訪れたという伝承にルーツを持つ。 お釜殿の外に立つ私たちにも聞こえるような大きな釜が唸る音が本当にするのです。そして 少ししたら唸り終わる。 これには 本当にびっくりでした。



また、今回 吉備を歩くのにもう一度 桃太郎説話・温羅伝承を調べて、説話を伝える論調がこの 10 年で微妙に変化しているのにびっくりしました。

岡山では「人を苦しめ 悩ます鬼を退治したヒーロー 桃太郎・吉備津彦」というのが、ほとんどの論調だったのですが、もうひとつの桃太郎説話・新説桃太郎として 朝鮮半島からやってきて 吉備を豊かにした温羅一族 その富をほしがった大和が、国の支配を狙ってうら一族を滅ぼし、大和に吉備を組み入れ、その後 吉備を治めた吉備津彦も大いに吉備を豊かにしたと紹介し、広くこの説が吉備そして岡山の民衆に広く受け入れられ手居るとする話まである。

随分 論調が変わりました。

製鉄集団など異文化集団の敵として「鬼」として、国を治める鬼伝説や一生懸命地域・人を助けるのですが、最後には裏切られてほりだされる何と桃の悲しい「鬼」伝承がある中、「鬼は自分たちの先祖・誇り」「鬼が村を救った」との民衆伝承も照会避けるようになり、岡山の桃太郎退治も随分変わったように思いました。

まもなく2月3日「節分」です。 今年も「福は内 鬼も内」です。

2010.1月27日

桃太郎伝説の吉備路 walk 「鬼ノ城」を訪ねる をまとめて

By Mutsu Nakanishi

【添付 整理転記させていただいた資料】

4. 桃太郎説話の元となった「温羅」伝説

[おかやま物語・総社市鬼ノ城・吉備津神社& 吉備津彦神社などの home page](#) より整理転記

5. 奥坂製鉄遺跡群 千引カナクロ谷製鉄遺跡

「現在出土している日本最古後半の製鉄炉がある千引カナクロ谷製鉄遺跡」

光永真一著 吉備考古ライブラリー・10 「たたら製鉄」より 整理転記

6. 古代の山城 「鬼ノ城」で鍛冶炉跡が6基出土 大規模にこの山城で鉄器生産か

7世紀後半 663年 朝鮮半島白村江の戦いでの敗北から、唐・新羅の連合軍の本土侵攻する備えか

[岡山県古代吉備文化財センター ホームページ](#) ほかより整理

【参考 和鉄の道】

■ 真金吹く吉備国 吉備の鉄 と桃太郎伝説 <http://buffalonas.com/mutsu/www/dock/iron/jstlbb11.pdf>

■ 光永真一著 吉備考古ライブラリー・10 「たたら製鉄」

■ インターネット検索：温羅伝説 , 鬼ノ城 ほか

岡山県古代吉備文化財センター home page <http://www.pref.okayama.jp/kyoiku/kodai/kinojou-top.html>

総社市 home page <http://www.city.soja.okayama.jp/kanko/kankochi/kinojo.jsp>

おかやま物語のみち http://www.pref.okayama.jp/doboku/doken/monogatari/inomichi/ura/ura_top.htm

吉備津神社 & 吉備津彦神社 home page ほか

桃太郎説話の元となった「温羅」伝説

おかやま物語 http://www.pref.okayama.jp/doboku/doken/monogatari/onomichi/ura/ura_top.htm

総社市 鬼ノ城 <http://www.city.soja.okayama.jp/kanko/kankochi/kinojo.jsp>

吉備津神社 & 吉備津彦神社 <http://kibitujinja.com/> & <http://www.kibitsuhiro.or.jp/main10.htm>

などの home page より整理転記



日本最古の製鉄遺跡「千引カナクログ製鉄遺跡」跡
現在は鬼ノ城GC内・緑地公園・第一公園・第二公園にあり2010.1.16

岡山市西部と総社市東部にまたがる地帯では、昔から桃太郎伝説のルーツともいべき吉備津彦命の鬼退治にまつわる「温羅（うら）伝説」が語り伝えられている。

総社市鬼の城山にある古代山城・鬼ノ城と、奈良時代に出来た日本最古の歴史書『古事記』・『日本書紀』に見える吉備津彦命が、大和朝廷の命を受けて吉備平定に向かう記述が基になっている。

第11代垂仁天皇（4～5世紀、古墳時代）のころ、異国の鬼神が飛行して吉備国にやって来た。彼は百済の王子で温羅といい、足守川の西の方の新山に城を築き、その傍の②岩屋寺に楯を構えた。温羅の姿は恐ろしく、両目はらんらんして虎や狼のごとく、ぼうぼうたるひげは赤く燃えているようであった。さらに身長は一丈四尺もあり極めて狂暴であった。そして遠くを航行する船を襲っては財物や婦女子を略奪し、乗っていた人を釜ゆでにしていたという（③鬼の釜）。人々はこの山を①鬼ノ城と呼ぶようになった。

そこで朝廷は、その温羅を平定するために

吉備津彦命を派遣することになり、吉備津彦命はまず吉備の中山に陣を構え（⑦吉備津神社 ⑧吉備津彦神社）、西には石の楯を築いた（⑤楯築遺跡）。一方 温羅は鬼ノ城に陣取る。



戦いが始まると矢合戦になったが、温羅は強く、双方の矢が空中で噛み合って落ちてしまった（④矢喰宮）。そこで吉備津彦命は2本の矢を一緒に発射したところ、一矢は温羅の目にあって沢山の血が流れ血吸川（ちすいがわ）となり、浜は真っ赤に染まった（赤浜）。温羅は雉（きじ）となって逃げたが、吉備津彦命は鷹（たか）となって追った。今度は、温羅は鯉となって血吸川に逃げたので、吉備津彦命は鵜となって温羅をくわえ、ついに首をはねた（⑥鯉喰神社）その首は串に刺してさらされた（⑨白山神社）。

しかし首は何年も吠え続けたので、犬飼武命に命じて犬に食わしたが、まだ吠え続けたのである。このため吉備津彦命は吉備津神社の「御釜殿」の下に埋めたが、13年間も唸り続けたという。

ある夜吉備津彦命の夢に温羅が現れ、「わが妻・阿曾媛にお釜殿の火を炊かせば釜を喰らせてこの釜で世の吉凶を占おう」といった。命はそのお告げの通りにすると、唸り声も治まり平和が訪れた。

これが現在も続く吉備津神社に伝わる「鳴釜神事」の起源で、その後、吉備国の統治にあたった吉備津彦命は、晩年、吉備の中山の麓の茅葺宮に住居を構え、281歳の長寿をまっとうした。

【参考文献】 [あるく岡山桃太郎伝説の旅（岡山市・岡山市観光協会）](#)・[岡山三市を結ぶ歴史ロマン主人公ゆかりの地をたずねる旅・図説岡山県の歴史・吉備津彦命の鬼退治・博学紀行岡山県](#)



古代にはこの伝承の舞台となった吉備の中山周辺は海岸線に近く、小高い吉備の中山は神体山と仰がれる。

温羅一族を滅ぼした後 吉備津彦は備中山の麓に茅葺宮を造って住み、吉備を治め、281歳で亡くなり、中山山頂部にに葬られたという。吉備の中山の山上にある御陵はこの吉備津彦命の墓と伝えられ、宮内庁が管理している。

現在、この吉備の中山の北東山麓と北西山麓に同じ吉備津彦命を祭神とする吉備津彦神社と吉備津神社があるが、いずれの社伝にも吉備津彦の屋敷跡に社殿を造営して吉備津彦を祀ったのが始まりと伝える。

このように二つの神社が近接してあるのは、大化改新の後 吉備国がこの吉備の中山を境とする備前・備中と備後に3分割された時に、吉備津神社がそれぞれの国の守り神として分社され、それぞれが国の一宮として信仰を集めてきたためである。

また、吉備津神社の釜殿で今に続く「鳴釜神事」これは神官と阿曾女と二人で執り行う神事。

阿曾女というお婆さんは温羅が寵愛した女性と云われているが、鬼の城の麓に阿曾の郷があり代々この阿曾の郷の娘が奉仕しているという。

阿曾女が釜に水をはり湯を沸かし釜の上にはセイロがのせてあり、常にそのセイロからは湯気があがっている。

神事が始まると祈願した神札を竈の前に祀り、阿曾女は神官と竈を挟んで向かい合って座り、神官が祝詞を奏上する頃、セイロの中で器にいった玄米を振ると鬼の唸るような音が鳴り響き、祝詞奏上し終わるころには音が止むという。

この釜からでる音の大小長短により吉凶禍福を判断しますが、そのお答えについては奉仕した神官も阿曾女も何も言わず、自分の心でその音を感じて判断するという。また、この阿曾の郷

は昔より鑄物の盛んな村で、お釜殿の大きな釜が壊れたり古くなって交換するのはこの阿曾の郷の鑄物師の役目であり特権でもあった。



この温羅の城「鬼ノ城」の東直下に広がる阿曾の郷の谷間は古代「真金吹く吉備の中山」と歌われた吉備の大製鉄地帯（奥坂製鉄遺跡群）で、今はゴルフ場の池の底になっているが、日本最古 6 世紀の製鉄炉が見つかった千引かなくろ谷製鉄遺跡などが眠っている。

この鬼ノ城・阿曾の郷を中心とした温羅伝説はこの地帯に渡来した製鉄集団の話と言われ、吉備の鉄の支配を目指した大和側の話とする説が一般的である。

一方、岡山では「この温羅一族が鉄器で武器と農工具を作り吉備を開拓して国を豊かにした」とする民間伝承が語り継がれている。「桃太郎が鬼を成敗した」とする大和が作り出した説話とともに民衆にとっては吉備の国に豊かさを作り出した温羅は「鬼」ではなく、親しみのある「吉備の開拓神」とする解釈が「もうひとつの桃太郎」として広く語られるようになってきた。

「真金吹く吉備の中山」と歌われ、古代の製鉄地帯吉備を象徴する吉備の中山。そして、鬼ノ城直下 血吸川が流れ下る谷あいには製鉄集団がいて、製鉄を行っていた阿曾の郷。豊かな吉備の地を攻めて、鉄と国を大和の支配化に組み入れたのが吉備津彦であり、そんな古代伝承の痕跡が色々残っている。



古代の正規の歴史書には登場せず、未知の部分が多い鬼ノ城は7世紀の巨大な朝鮮式の山城。

すり鉢を伏せたような形の山で、斜面は急峻だが頂部は平坦である。この山の八合目から九合目にかけて、城壁が2.8kmにわたって鉢巻状に巡っている。温羅の伝承は4・5世紀頃の伝承が元と考えられているで、直接的にはずれている。

城壁は、一段一列に並べ置いた列石の上に、土を少しづつ入れてつき固めた版築土塁で、平均幅約7m、推定高は約6mもある。

要所には堅固な高い石垣を築いており、その威圧感は天然要害

の地であることとあわせ、圧倒的な迫力をもっている。このように、版築土塁や高い石垣で築かれた城壁は、数m～数十mの直線を単位とし、地形に応じて城内外へ「折れ」ていることに特徴がある。



城壁で囲まれた城内は比較的平坦で約30ヘクタールという広大なもので、出入り口となる城門が4ヶ所にあり、4つの谷を含んで山の周囲を取り囲んでいるため、谷部には排水の必要から水門が6ヶ所に設けられている。城内には、食品貯蔵庫と考えられる礎石建物跡や狼煙場、溜井（水汲み場）もある。この他に城内には貯水池とみられる湿地が数ヶ所ある。

さらに兵舎、各種の作業場なども予測されるが未発見である。

昨年 12 月 すぐ下に 古代の製鉄地帯をすぐ下に見降ろす鬼ノ城東門の上の尾根筋から鍛冶炉を伴う鍛冶工房跡が発掘され、鬼ノ城内で大規模に武器を作って、備えていたことがわかってきた。

百濟再興のため、朝鮮に兵を送った日本が、663 年の白村江の戦いで敗北。唐・新羅連合軍が本土に侵攻するのではないかと危機感を抱いて、西日本各地に築かせた古代山城の一つであるという説に信憑性を帯びてきたといえる。

古代の山城 鬼ノ城で鍛冶炉跡6基が出土、大規模にこの山城で鉄器生産か

7世紀後半 663年 朝鮮半島白村江の戦いでの敗北から、唐・新羅の連合軍の本土侵攻する備えか

岡山県古代吉備文化センター ホームページ ほかより <http://www.pref.okayama.jp/kyoiku/kodai/kinojou-top.html>

2009.12.26, by Mutsu Nakanishi

桃太郎説話や「温羅伝説」の舞台として、古くから親しまれてきた鬼ノ城。

その築城目的は、663年の白村江の戦いにおける敗北から、唐・新羅の連合軍が本土に侵攻するのではないかと危機感を抱いた当時の政権が、西日本各地に築かせた古代山城の一つであるという説がよく知られている。しかし『日本書紀』などには一切登場せず、築かれた時期についても様々な説があり、未だ多くの謎に包まれた遺跡である。

昭和53（1978）年の鬼ノ城学術調査団による調査、さらに平成6（1994）年からの総社市教育委員会による発掘調査が行われ、角楼（かくろう）や城門など、城の外郭（がいかく＝外側）の壮大な姿が次々と明らかになりました。

城内については、平成11（1999）年に岡山県古代吉備文化センターが確認調査を行い、礎石建物群の様相や鍛冶関連の遺構の存在が明らかになりました。今回は、前回の確認調査で得られた成果をもとに、より広い調査区を設定し、平成18（2006）年度から7か年計画で調査に取り組んでいる。

■ 調査位置図（H21年度）



総社・鬼ノ城に鍛冶工房ゾーン確認 遺構2カ所目 鉄滓など出土

古代山城・鬼ノ城（国指定史跡、総社市奥坂）で岡山県古代吉備文化財センターが進めている発掘調査で1日までに、同城内2カ所目となる鍛冶（かじ）工房の跡が確認された。鉄の不純物・鉄滓（てっさい）が大量に出土、炉壁や鉄器の一部も見つかっており、鉄器の生産・補修が行われていたとみられる。以前に見つかった鍛冶工房跡と近く、一帯に工房ゾーンが広がっていた裏付けになると注目を集めている。

鍛冶工房跡が見つかったのは、東門跡から西に約180メートル入った尾根上で、直径1・5メートルの範囲から関連遺物や熱を受けて焼けた岩が集中して出土した。炉壁は幅11センチ、高さ9センチの粘土質で熱を受け表面が黒く溶けている。鉄器片は5ミリ四方の板状で器種は不明。鉄滓は約200点で、大きい物は1辺10センチ以上ある。

古代山城に詳しい亀田修一岡山理科大教授（考古学）は「全国の古代山城で鍛冶工房が確認されているのは鬼ノ城だけで、機能を把握する重要な手掛かりとなる。何を作っていたか知るため今後は製品の出土が期待される」と話している。

鬼ノ城で鍛冶炉跡6基が出土、大規模に鉄器生産か

全国の古代山城で唯一、鉄器にかかわる鍛冶（かじ）工房跡が確認されている鬼ノ城（国史跡、総社市奥坂）の発掘調査で28日までに、新たに計6基の鍛冶炉跡が出土した。当時の官営工房に通じる技術も確認され、必要とする鉄器を城内で供給できる大規模な生産体制を持っていた可能性が高まった。

岡山県古代吉備文化財センターが7月から、東門跡近くの谷部を発掘調査。9月初旬には鍛冶の際に出る鉄の不純物・鉄滓（てっさい）などが見つかり、谷部一帯に鍛冶工房ゾーンが広がるとみられていた。

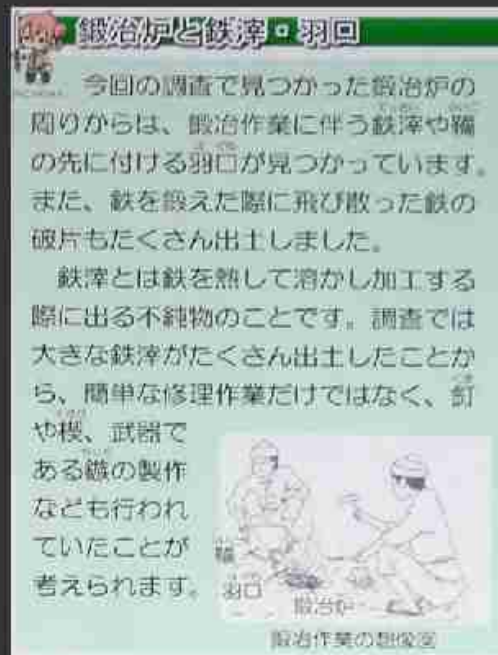
鍛冶炉跡は、3カ所の調査区（計1350平方メートル）すべてから出土。地面に穴を掘り、内側に粘土を張った構造で、最大で直径30センチ、深さ8センチ。高温を受けて炉壁は赤く焼け締まり、一部には鉄滓が付着していた。伴った須恵器（すえき）からいずれも7世紀後半とみられる。



鬼ノ城で新たに見つかった鍛冶炉跡



【鬼ノ城 鍛冶工房跡で発掘された鍛冶遺物の展示】



鉄滓 鍛冶炉



羽口



発掘の様子



羽口の残る鍛冶炉

吉備古代文化財センターに展示されていた鬼ノ城 鍛冶工房跡で発掘された遺物 2010.1.15.

岡山県立吉備古代文化財センターにて 2010.1.15.

**2009年10月1日(木) 調査のきっかけ**

「ここを掘ったら出る、というのがどうして分かるの？」私たちがよく受ける質問です。

9月下旬から新たに発掘を開始したこの地点は、地表に落ちていた1点の遺物が調査のきっかけになりました。

これは、鍛冶炉の火力を上げるために風を送る吹子(ふいご)という装置の一部で、送風口にあたる部分です。前の調査区に引き続き、ここでも鍛冶工房が出てくるのか、それともハズレなのか、掘ってみないと分かりません。(M)

**2009年10月9日(金) 無数の鉄滓**

鉄滓というのは、鍛冶作業を行った時にできる鉄の不純物のかたまり。

調査を始めて間もなく、無数の鉄滓が出土し始めました。

写真の白い札はその位置を示しています。

この付近にも鍛冶工房があったことは確実なようです。(M)

**2009年10月14日(水) 突然の雨に・・・**

現在の調査地点は、城内でも東端部にあり、駐車場から歩いて約30分の距離。

雨が降り出したからといって雨の中を下山するのも大変です。

急きょ現場にブルーシートを張り、突然の雨と雷をやり過ごすことに。

日没も近づき、暗い山の中で途方にくれる面々でした。(M)

**2009年10月21日(水) 待望の鍛冶炉！**

吹子(ふいご)の一部や鉄滓がたくさん出土し、ここに鍛冶工房があったであろう状況証拠は出揃っていましたが、ついに、待望の鍛冶炉を発見！

直径約30cm、お椀形に地面を掘りくぼめた炉で、真っ赤に焼けています。

まさにこの場所で鉄を加熱し、鉄製品を作っていたのです。調査参加者一同、感激の瞬間でした。(M)

**2009年10月29日(木) またまた鍛冶炉！**

前回紹介した鍛冶炉から数m離れた所で、2つ目の鍛冶炉を発見しました。少なくとも2つの鍛冶炉を備え、鉄滓などの量も多く、どうやら想像していたよりも本格的な鍛冶工房のようです。

わずかに1点の遺物を拾ったところからスタートした調査地点でしたが、予想以上の成果が上がりました。(M)

**2009年11月6日(金) 今度は何が？**

調査期間もあと2か月を切り、いよいよ今年最後の調査区で発掘作業が始まりました。ここでは10年前の確認調査で「竪穴遺構」が見つかり、鉄滓やふいご羽口などが出土していて、鉄器を製作した鍛冶場だったと考えられています。

今回の調査は、この竪穴周辺を精査し、鍛冶作業の様子を解明するのが目的です。まだ旧トレンチを再掘削している段階ですが、今度はどんな発見が飛び出すか楽しみです。(O)



歴ナビ

旅する日本史

[illegible]

09年 考古学を振り返る

[illegible]

コトサシを利用した
明治時代の人々
の娯楽一環は山
の平之無道野
山州の



明治の無道野山州



十歳の子供が、たゞ世話を
なすお母さんだけの人間。両親
は、山崎町・湯江温泉

邪馬台国 近づいた



新たな那馬台埋没争の火種になった
御台遺跡の大型建物跡＝区民館前井



●「さくらんぼ」は、さくらんぼの皮を剥いて、果肉をすりつぶして、砂糖を加えて煮詰めたもの。さくらんぼの皮は、さくらんぼの皮を剥いて、果肉をすりつぶして、砂糖を加えて煮詰めたもの。

纏向、論争呼ぶ建物跡 ■ 12万年前の最古級石器

〈1月〉
 万葉集歌の木簡が現つた。京都府京丹波川
 町の黒塚遺跡から、8世紀前半の瀬田川
 町の「市神座」で「ちひしき宮跡」出土の銅手鏡
 出雲・道下遺跡で、「宇奈都」の10世紀に
 用いられた土器の多量の木簡も遺跡で奈良
 時代（同時期）の埴田遺跡で、2～3世紀に
 作られた最大規模の鉄器工部跡を抽出した。

〈2月〉
 神戸市の東片瀬で約2千年前の鉄剣の跡
 題とみられる石壁跡が出土。堤川地区等市
 ・本郷町跡。8世紀中頃の土器成層跡跡
 ・本郷町跡。8世紀中頃の土器成層跡跡
 ・本郷町跡。8世紀中頃の土器成層跡跡
 ・本郷町跡。8世紀中頃の土器成層跡跡

〈3月〉
 所沢市所沢市の大田遺跡から、弥生時代
 頃の1世紀後半の本郷町跡出土。成層跡跡
 頃の1世紀後半の本郷町跡出土。成層跡跡
 頃の1世紀後半の本郷町跡出土。成層跡跡

▲**4月**
埼玉県草加市の建設事務所から、巨野市市井の田畠約5千坪以上を売買し、建設用地とする旨の下達があった。約2千坪市井の田はヤシ野人の所有地が把握される。

▲**5月**
岡山県瀬戸市の土師遺跡で、弥生時代がある。約2000年前の土師に似た土師を築山▽愛知県春日町の水戸寺にある陶器遺土▽秋田県雄物山▽江戸時代の墓から、大量の小刀などの古山手▽「地味師」の墓から、大量の腰井戸の遺構が出土▽「地味師」の墓から、大量の腰井戸の遺構が出土して、古山手の土師の時期が、北九州の土師（548年ごろ）に相当する240年と推定され、古山手の土師の時期が推定された。

▲**6月**
8世紀から、4世紀初めの肥後県・熊本県巨野山崎の所領地。巨野山崎を約1500年の丸太の薪で覆った遺跡が明らかになった。巨野山崎の古山手の土師遺跡で、古山手の土師の時期が推定された。巨野山崎の古山手の土師の時期が推定された。

2009.12.25. 朝日新聞 夕刊より

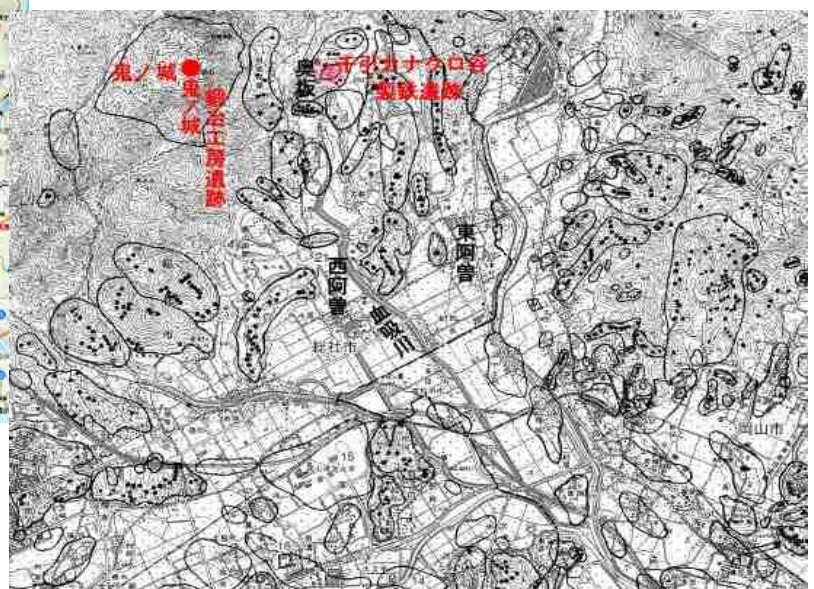
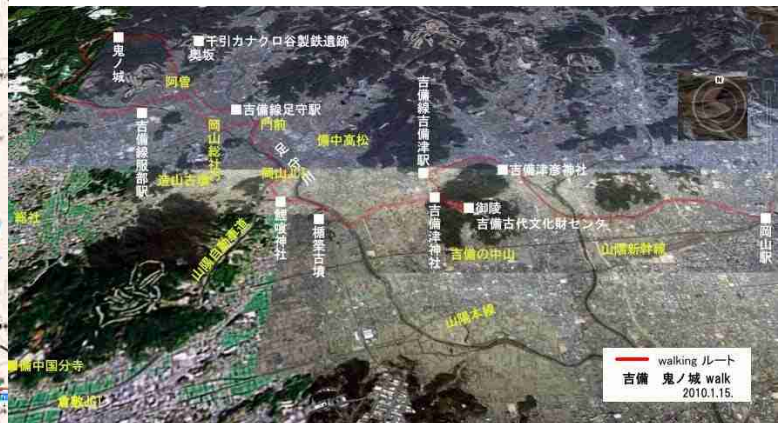
2009.1

奥坂製鉄遺跡群 千引カナクロ谷製鉄遺跡

「現在出土している日本最古後半の製鉄炉がある千引カナクロ谷製鉄遺跡」



鬼ノ城 東門の上からみた奥坂 千引カナクロ谷製鉄遺跡 (鬼ノ城 GC 内中央部の貯水池の下) 2010. 1. 15.



鬼ノ城の東山麓山裾に広がる製鉄遺跡群

〔右図は総社 阿曾周辺の遺跡地図〕

鬼ノ城直下の東山麓に広がる阿曾の郷は「真金吹く吉備」の古代吉備の大製鉄地帯の心臓部

その中心をなす「現在出土している日本最古 6 世紀の製鉄炉がある千引カナクロ谷製鉄遺跡」

是非一度足しためたかった古代の製鉄遺跡。何度か周辺を歩きましたが、鬼ノ城 GC の貯水池の下に眠っていると聞いただけ、正確な位置 どんな所に製鉄炉が合ったのか知りませんでした。今回 新たに発掘された 7 世紀の鍛冶工房跡のある鬼ノ城・東門の山上からその位置・地形を眺めることができました。

『千引カナクロ谷製鉄遺跡』は、鬼ノ城の東山麓の幾つもの小さい谷間が続く奥坂の北に開ける小さな谷間に国内最古急の製

鉄炉が出土した製鉄遺跡(6世紀後半～7世紀初頭)で、炭焼き窯3基を含む製鉄炉4基の遺跡全体は、60㎡という当時としては大規模な構造を持つ。

この鬼ノ城直下の東山麓周辺ではこのほか、奥坂製鉄遺跡群と呼ばれるいくつかの古代製鉄遺跡が出土している。

古代「真金吹く吉備」と呼ばれた吉備の古代の大製鉄地帯の中心にある製鉄遺跡である。

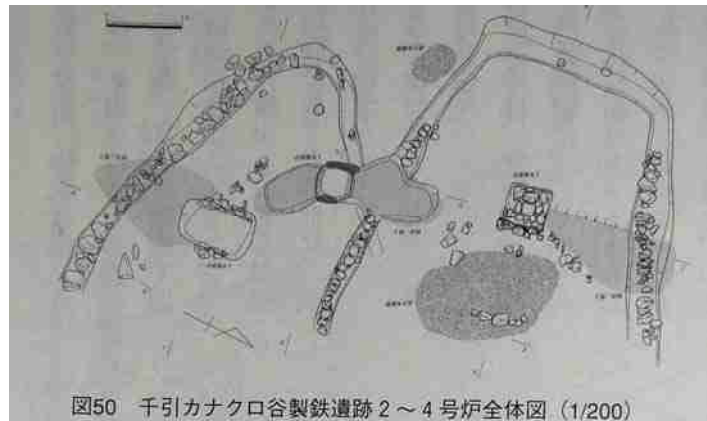
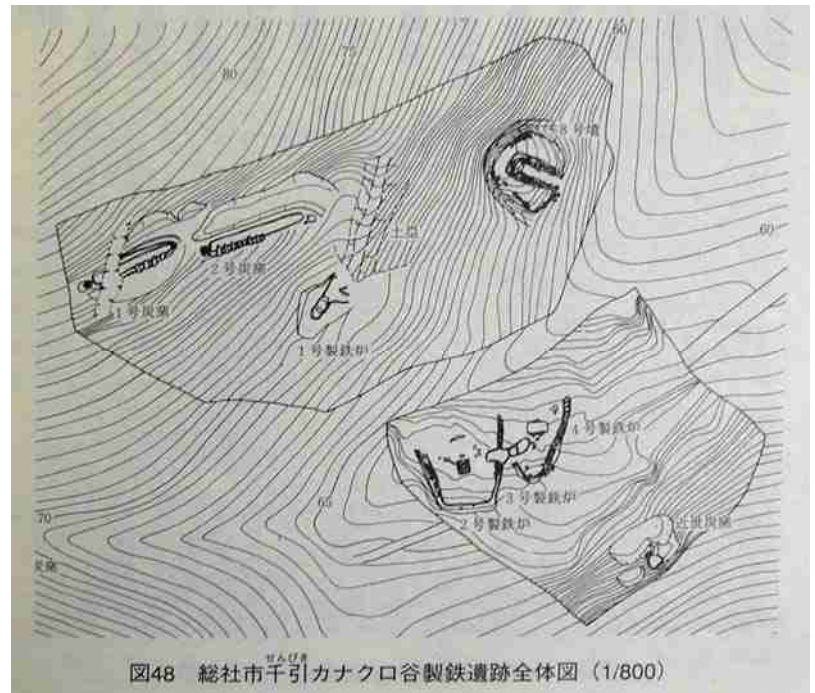
遺跡はゴルフ場建設に伴う調査で出土したが、現在「鬼ノ城GC」の中にある貯水池の下20mのところに埋め戻されて眠っているという。

千引カナクロ谷製鉄遺跡を含め、この周辺で出土した数多くの製鉄遺跡については光永真一氏著 吉備考古ライブラリー・10「たたら製鉄」に詳細整理され、掲載されている。

光永真一氏著 吉備考古ライブラリー・10「たたら製鉄」から千引カナクロ谷遺跡の概要・製鉄炉について解説記述されている部分を抜き出すと次のとおりである。

千引カナクロ谷遺跡は北東方面に開く小さな谷の奥まった南斜面裾に2～4号の3基の製鉄炉が重複して存在し、対する北斜面を5メートル上がって1号製鉄炉、その上方に2基の「ヤツメウナギ」(炭焼き窯の表現)があり、谷の西奥にもう一基の「ヤツメウナギ」が位置している。炉の操業順は4号炉がもっとも古く2号炉→1号炉→3号炉と考えられ、操業の終了は7世紀初頭前と考えられた。

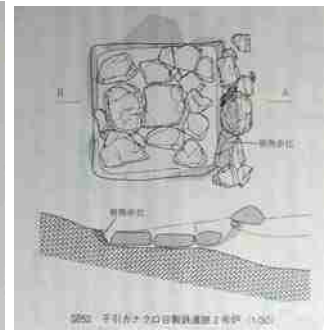
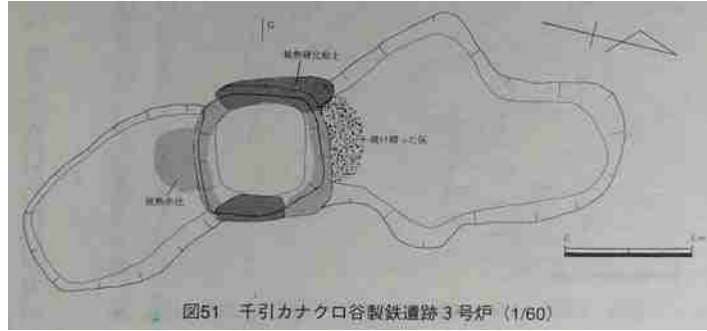
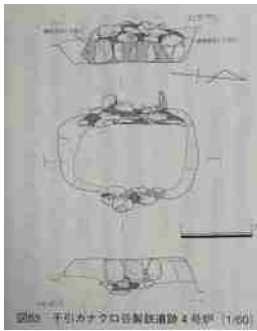
これまで知られていた7～8世紀代の炉跡と比べても一回り大きな地下構造に石を丁寧に使用する4号炉が国内最古級の製鉄炉と判明した。



千引かなくろ谷製鉄遺跡 左より 4→3→2号製鉄炉 光永真一 吉備考古ライブラリー・10 「たたら製鉄」より

国内最古級の4号製鉄炉は2号炉から7メートルほど離れて存在し、周りにU字1状に掘られた溝には暗渠状に石敷きが施されて、2号炉のそれと重なっている。地下構造となる土コウは205X135cmと大きく、深さ25～50cmを測る側壁のうちでも、長辺には粘土で目張りされた3段の石積み良好に残っていた。石積みは全体に熱影響をうけているが、より強い熱影響を示す2段目以上に補修が繰り返された跡がみられた。

2～4号炉一帯の作業面や排滓溜りからは鉄鉱石の小片が出土し、これが原料と考えられている。また2～4号炉一帯排滓溜りから須恵器が出土し、6世紀第Ⅲ四半期と判断された。(途中省略して整理抜粋させてもらった。)



千引カナクロ谷の製鉄炉 左より 4号 3号 2号製鉄炉 いずれも日本最古級の6世紀第Ⅲ四半期の製鉄炉

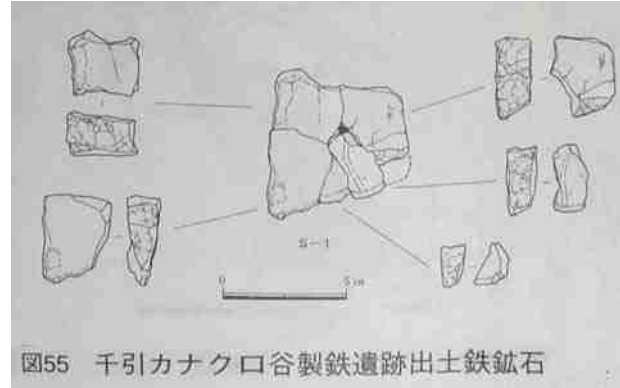
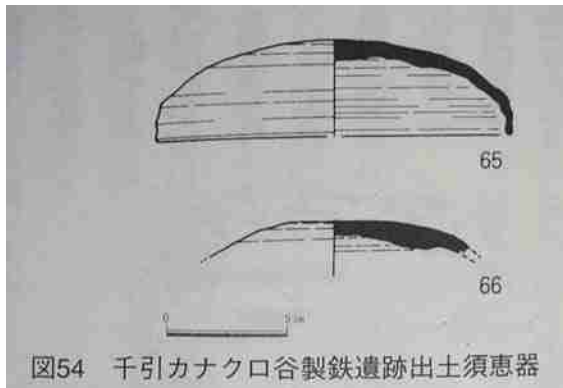


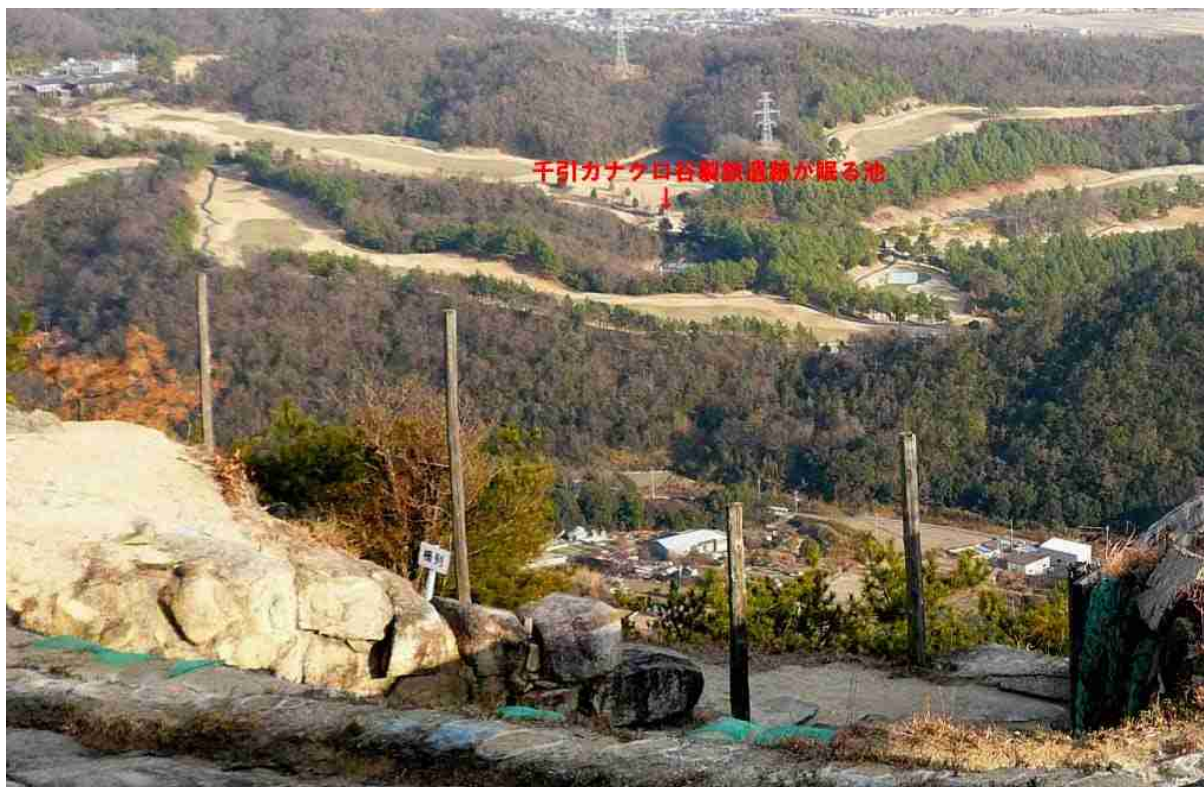
図54 千引カナクロ谷製鉄遺跡出土須恵器

図55 千引カナクロ谷製鉄遺跡出土鉄鉱石

千引カナクロ谷製鉄遺跡より出土した須恵器と製鉄原料と見られる鉄鉱石片

ここまで 上記 光永真一著 吉備考古ライブラリー・10 「たたら製鉄」より 整理転記させていただきました。

この奥坂のすぐ東側にはが急峻な山肌を見せる鬼ノ城（鬼城山）がそびえている。この奥坂の製鉄遺跡群は鬼ノ城 GC の中にあるので、フリーに遺跡のある場所にはいけないが、この東阿曾・奥坂は鬼ノ城 東門の直下にあたり、この地域を鬼ノ城 東門から眼下に見下ろせる。また、急峻な崖道ではあるが、この東門と阿曾の郷との間には道がある。時代が少し下るが、7世紀 唐の侵攻に備えたこの山城が完成し、城の中でも武器の生産が行われた鍛冶工房が見つかったが、この阿曾・奥坂地区で生産された鉄と密接につながっていたと思われる。



鬼ノ城 東門 山上から見た東山麓 奥坂 千引カナクロ谷製鉄遺跡が眠るゴルフ



南側から阿曾の郷・鬼ノ城・奥坂を google earth で鳥瞰

